火野葦平選集

第四卷

火野葦平選集第四卷

東京創元社版

火野葦平選集第四卷

昭和三十四年二月二十日初版
定價五〇〇圓

著者　火野葦平
發行者　小林茂
印刷者　田中末吉

東京都新宿區新小川町一ノ一六
東京創元社發行
電話（33）八五一一（代表）
振替東京一五六五

印刷・理想社　製本・鈴木

© Printed in Japan　1959・2

第四卷目次

青春と泥濘　一
魔の河　一六九
戰爭犯罪人　二七三
解說　四二一

青春と泥濘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小さき盲目の魚よ、汝は神妙不可思議なる賢者なり。
小さき盲目の魚よ、なにものが汝の眼を奪ひ去りたるや？
汝の耳をひらきて我が願望をきき入れよ、
我に愛しき人をもたらせ、小さき盲目の魚よ。

（ビューリーの魔魚の呪文・印度古譯）

靜謐のなかにあつた。

深いジャングルの一隅である。地圖によつても正確な地點を探すことは困難であつた。地名など、もとよりなかつた。任務をあたえられてこの地點に瀨振りをかまえてから、二十日以上になるが、こちらからの連絡以外、本部からはなんの指示もなかつた。

一箇中隊といつても、四度目の中隊長代理、今野軍曹以下三十七名、三ケ所に分哨を配置し、食糧探しの一隊が出てゆくと、中隊本部は閑散だ。兵隊は深い森や藪にのまれてしまつて、まつたく人影を見ぬことも少なくない。兵隊も少なかつたからであるが、兵隊が疲れていて、うろうろと腹減らしするよりは、寢ている方がよいからであつた。二日も三日も横になつたきり動かぬ兵隊も何人かある。ここに一人例外なのは團栗という綽名をつけられている田丸兵長のみ、戰友たちからもの好きを笑われながら、熱心に毎日動く。

「おい、團栗、たいがいで止めといた方がええぞ」

戰友が忠告するとへらへらと笑つて頭を掻くが、一切採用しない。そして、一日にかならず四回、午前二度、午後二度、森のはずれにあつて、どんなところでもすぐ名をつけることの好きな兵隊たちが、「印度公園」と呼んでいる高臺へ出かけてゆくことを缺かさない。休むのは爆擊と雨と任務とのときだけだつた。そこまでは百米

第一章　鹽分の價値

二十二度目の瀨振りであつた。家というものを忘れてから久しい。敵の足音や聲さえもきくことのあるこの最前線の屯營は、ときどきはげしい雨にたたかれ、しばらくは無爲にして退屈な日が流れた。敵からの攻擊もないかわりに、こちらからも攻擊する力を失つていたからである。あの凄慘な最後の日が來るまで、陣地は不氣味な

足らずなのだが、往復二百米、四回八百米も一日にむだな行軍をするのは馬鹿の骨頂、もともとあいつは賢い方ではなかつたが、今度のような困難な戰鬪つづきで、いよいよ頭がどうかなつた、たれからもそう思われた。いわれた。ことに田丸のマラリヤは慢性で、ここの惡性マラリヤは頭に來るものが少なくなかつたのである。專門家である軍醫少佐が發狂して、敵の偵察がやつて來たとき、自分の赤褌をぬいで下からふりまわし、げらげら笑いころげながら谷間に落ちた話をきいたのは、まだ一週間にもならぬ前だつた。

稻田兵長はからかいと心配と半々で、たびたび、

「おい、團栗、お前、氣はたしかだろうな。……へたばらんようにしてくれや。お前の足の強いのはよう知つとるが、なにしろ大行軍だからな」

すでに數年間、中國を處女戰場として、各地を轉戰しつつ數千キロを歩いて來た兵隊たちである。數萬キロということもできようか。その兵隊たちがわずか八百米の行軍を大事業と考えているのであつた。剽輕な表現のなかに苦澁があつた。笑いとおどろきと、嘲りと、なにかへの怒りと、——しかし、現實はいま八百米の記錄保持者田丸兵長を、戰場のうすよごれた英雄としている。たしかに、いまの中隊中で、命令受領の江間上等兵をのぞいて、毎日八百米の行軍をしてたおれないと、斷言できる者はおそらくなかつた。

「なんで、お前、そんな馬鹿な腹へらしするんだ。よつぽどええことがあるとみえるな」

「うふふ」

田丸は笑つて、答えなかつた。

まだ本格的に雨季に入つてはいなかつたが、そのきざしはあらわれていた。近ごろでは晴雨半々くらいである。降りだすと山も木も草も土も砂もひとかたまりに押し流すようなはげしさで降つた。雨のなかに立つていると、小石をぶつつけられるように痛かつた。降ると全身ずぶ濡れになるが、止むと強烈な太陽の直射ですぐ乾く。天候の急變は氣まぐれで、ほとんど目まぐるしい。さして地上に風は感じられないときでも、青空にたちまち雲があらわれ、雲が去り、雨が降り、雨が去る。夜などでも、靄雲がとじこめ、星のひと屑も見えず、また雨かと思いながら、靴の紐を結んでいるうちに、空には無數の星がちりばめられ、皓々たる月が出ている。女心と秋の空どころの騷ぎではない。

印度は暑いと簡單にきめて來た兵隊たちは、このインパール平原に來ていささか戸まどいした。三月はじめ(昭和十九年)この作戰開始以來、ビルマから國境を越えて印度に入つたが、チン丘陵の最高峰のケネデ・ピイ

ク（八八七一呎）で一夜を明かしたときには、はげしい寒さのために眠ることができなかつた。ふるえながら、齒をがちがち鳴らして過ごした。腐木となつた不氣味な森林を、凩のような烈風が鳴らす。吹雪を思わせるような、まるで北國の寒夜であつた。火をとつて煖をとつたが、印度に來て焚火をしなくてはならぬとは思いもかけなかつた。前進してインパール盆地に入ると、ロクタク湖の水面すら海拔二千呎以上あり、現在位置している場所でも、四千呎を下らない。敵の飛行機から遮斷されている瀨振りは、ほとんど陽の目を見ることがないので、雨に濡れれば乾くことがなく、いつも土が濕つていて、快適というわけにはいかなかつた。そうして、夜は冷えた。

ここに來てすぐは、とりあえず天幕で住居をつくつた。上空から見えないようにするため、できるだけ樹木や藪の深いところをえらばねばならなかつた。百尺近く繁茂した巨樹が立ちならんでいて、樹の根に庵を結び、屋根に樹枝や竹をのせて置けば、まず上からはわからない。のちにはすこしずつ工夫して樓みよくしたが、原始的であることに變りはなかつた。孟宗竹に似た竹林が多く、その竹が役に立つた。それでも住居はすべて太陽から隔離されている。陰鬱でじめじめし、いつかものの腐敗したような饐えた惡臭をはなつようになる。床をすこし高くしてはあるが、寢ると氣持わるく濕氣が身體にしみる。蚤はいなかつたが、虱が簇生した。身體が腐る思いなので、暇を見ては日向に出る。太陽の直射は強烈で永くは立つて居られない。陰陽の溫度の差が極端なのだ。身體が弱つているので、すぐ日射病になるのだつた。

暑さに平氣なのは印度兵だけである。二人中隊に配屬されていた。それでも陽の下に出ると、まぶしそうに眼を細め、漆黑の手をかざして、顏の上に日かげをつくる。彼等の黑さには、相當に日燒けして赤銅の顏に眼ばかりぎょろつかせている日本の兵隊たちもかなわない。ティディムが前進基地であつたころ、國境の民族たるチン人の赤ん坊を見て、それが大して黑くないのを見て鄕愁をおぼえたものだつた。ところが大きくなるにつれて黑くなるらしかつた。印度兵に芋をむかせたり洗濯させたりすると、その手の黑さがつきはせぬかと氣が氣でなかつた。配屬になつて來たとき、握手を求められて、思わず手をひつこめたのは今野軍曹である。

「印度人でも暑いか」

陽を避ける印度兵に兵隊がからかい半分できくことがある。そんなときには印度は暑いところときめて來て、印緬國境を越えてから、寒さにふるえたことをもう忘れているのである。その失禮な質問に對して、すこし生意氣なところのある、おしやべりの炊事係りハリハル一等兵は、顎をしやくつた氣取つた樣子で答える、次のよう

な意味のことを――あなたがたは中國の戰場から來た。しからば漢口を知つている筈である。漢口は中國でも、いや世界でも有數の暑熱の都會だ。屋上から雀が燒けて落ちるという諺さえある。中國人はすべて表現を大げさにするので、いうほどではないとしても、漢口で永く巡査をしていた自分の友人が、夏になるとパンジャブ地方にかえつて來たものだ。無論、避暑の目的で。

印度語のわかる者は兵隊のなかにはいなかつた。たつた一ついつか皆が憶えた言葉がある。ジャイ・ヒンド――これは印度の勝利という意味だそうだが、印度兵は出あいがしらに、かならず右手をあげて、兩方から、「ジャイ・ヒンド」といいあう。正式の挨拶である。のちには印度兵と日本兵と出あつてもいいかわすようになつた。印度語は通じないので、ハリハルは英語で話すのである。ところが中隊でもどうにか英語のわかるのは今野軍曹と小宮山上等兵としかいない。中學校で英語の教師をしたこともある小宮山の方は、自分でもよく話すことができた。ハリハルは日本語はほんの片言しかしやべれなかつたが、シンガポールで日本人の醫者の家で三年近く庭番をしたことのあるというババ一等兵の方は、片言ながら、ひととおり日本語を話せた。こういう印度兵が他の部隊にも通譯がわりに配屬になつていた。ハリハルは流暢な英語で漢口の話をすると、ひとりで愉快そうに笑つた。のちには哀れな死にかたをしたこの印度國民軍の若い兵隊、(彼は二十三歳、ババは二十六歳)は、いつもたれも面白がらない警句を吐くのが好きだつたが、なにごとでもまともないいかたをせず、兵隊たちを齒がゆがらせた。愚鈍ではあつたが、陰日向のない正直者のババの方を兵隊たちは好いていた。ババは、印度人でも暑いか、ときけば、おどおどとはにかんだ樣子で、やつぱり暑いと答えるだけであつた。しかしながらこの印度の太陽の強烈さは、もう永いこと缺乏している鹽の生產に寄與するところ多大であつた。兵隊たちの製鹽業はすこぶる奇拔な方法によつていた。

鹽分は人間に缺くべからざるものである。動物でもそうだ。そうして、その鹽分の缺乏のために、どの部隊も馬が使用に耐えなくなつているのである。一日に一度、命令受領にゆく江間上等兵が、わずかに、この中隊が忘れられていないということを證明する一本の紐であつた。そうしておしやべりの江間上等兵は、かえつて來ると、退屈している兵隊たちに、自分の見聞を細大もらさず報告した。鹽の缺乏のために馬の腰が拔けているという話をしたのも彼である。

東北生まれの江間は特別に訛のはげしい言葉で、大きい眼をうるさいほど瞬きさせながら、身ぶり手まねをま

じえ、その癖、こんな話したつて仕様がないんだというように、なにかひどくつまらなそうな様子で語る。
「もう輜重隊の馬なんて、使いもんになるのは何匹もいないや。みんな、腰が抜けてな。可哀そうに、役に立たんようになると、食糧にされてな。これまで可愛がつたのに食うなんてのは情においては忍びんが、背に腹は換えられんのだろう。鹽不足で、腰が弱くなつてるんだ。坂道はもとよりのこと、平地でもすぐ後肢をついて全然歩けんらしいんだよ。……輜重隊の戰友が話しとつたがな、馬の方が人間よりよつぽど賢いぞ、つてな。どうしてやときいたら、馬の奴とつくの昔に鹽氣をとる工夫をおぼえてやがるという。人間より馬の方が鹽分が大切なんだ。ならんで行軍するだろう。すると強い陽に照りつけられて、身體中に汗が出らあな。そいつを尻尾で左右、ばさつ、ばさつとたたくんだ。そら、蠅を追うときやつてるだろう。あれをくりかえすんだ。すると身體の汗が尻尾にくつつく。そいつを舐めるというんだ。うん、いや、自分で自分の尻尾は舐められん。前の奴の尻尾を舐める。ひとのを舐めるかわりに、自分のも舐めさせる。うまいことを考えやがつたな。ところが、そこが畜生で、限度を知らん。あんまり強くしやぶりすぎて、尻尾の毛が抜けてしまうんだ。輜重隊の馬の尻尾が古箒みたいになつているのを氣づかなんだかつて、戰友はいうんだよ」
「ふうん」感にたえたように首をひねつた小宮山上等兵が、くすぐつたそうな顏つきになつて、
「ちよつときくがね」
「あん？」
「その話はわかつたがな、すこし腑に落ちないことがあるんだ。順々に前の尻尾をしやぶるわけだろう？　そうすると、一番前の馬はどうするんだ。しやぶられるばかりで自分がへたばるじやないか」
「それだよ、俺も輜重隊の戰友にそれをきいたんだ。そしたらな、そりやしやぶられ損だつていやがつた。平等にするなら圓陣をつくらにやならんもんな、そんなこたできねえや」
「そんなら、最後尾の奴はしやぶり得か」
「そういうわけだな」
皆笑つた。空腹から出たぼそぼそした笑い聲だつた。しかしこれは寓話ではなかつた。このたわいもない報告は兵隊たちにひとつの絶望的な勇氣をあたえた。それから兵隊たちの奇妙な製鹽作業が始まつた。敵側から遮斷された土堤の蔭を飛びまわるようになつたのである。
早朝から、日沒にいたるまで爆音が絶えることはない。一日に十度以上はこの瀨振りの上も通過するので、そういう運動も對空監視哨つきだ。運動中も何度も待避した。白いものを見せることは絶對禁物である。また上空に敵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

機がいるときにちよつとでも動くと發見される。一人でも見つけると敵機は執拗に銃擊をしたり、爆彈を投下したりする。日本軍の飛行機はほとんどあらわれず、爆音がすれば敵機にきまつていた。機數の不足と、長距離なのと、アラカン山脈を境とする氣象源の相違と、對空火器の熾烈さと、敵航空兵力の絕對優勢さとによつて、日本航空隊のインパール爆擊は容易の業ではなかつた。ビシェンプールをはじめとするインパール周邊要地の對空陣地には、おびただしい高射砲が配列され、襲擊に對しては如露の水をさかさにして浴びせるような猛烈な火力をうちあげる。その音は太鼓を亂打しているようにきこえた。ところが、日本の飛行機がほとんどやつて來ないので、敵の對空陣地は閑散のため高射砲は法にない活躍をする。砲身を水平にしてこちらの地上陣地を射つて來るのである。日本軍は逆であつた。頭上に掩いかぶさる敵機の跳梁に對して、前線にはほとんど對空火器がなかつた。やむなく小銃射擊を試みるがなんの效果もあるわけはなかつた。傍若無人な敵機の攻擊に齒嚙みしたある山砲の大隊長は、砲身を上空にむけて發射した。敵機は落ちずただ陣地を暴露したにとどまつた。爆擊機戰鬪機、各二十機ほどがたちまち襲來し、一門を殘して全部の大砲と、多くの兵員とを失つた。そうして、そのときお附武官をしたこともあるというその名高い大隊長は戰死したのである。味方の重砲八門もモイラン近傍まで進出していた。しかし、射擊はほとんど行わず沈默をまもつている。彈丸の缺乏もあつたが、射擊を始めるとたちまち數十機の戰鬪機爆擊機が飛び立つて來るからである。二三發射つと、すぐに陣地變換をしなければ危險であつた。しかし上空から見れば砲車の轍のあとは歷然としていて、進入路は隱しようがなかつた。陣地は砲彈と爆擊とに日夜さらされた。しかしながら、この八門の加農砲は遂に日本軍がインパール平原から撤退するとき、自らの手で破壞し去るまでは、不思議と二門の被害を見たにすぎなかつた。

敵の砲擊はすさまじかつた。こちらが一發射てば百發のおかえしが來た。霧に掩われることの多い盆地の未明から、朝の挨拶をするように砲擊が始まる。つづけさまに射ちだされる砲彈は箒ではくように、遠距離から逐次前線へちぢまつたり、左右に振子のように動いたり、氣まぐれに豆でもばらまくように散らばつたりした。太鼓をたたくように射ちやがるなと呟く兵隊の譬喩は、太鼓だつてあんなに早くはたたけんよという、もう一人の兵隊によつて否定される。その音はときに連續して風の音のようにきこえたり、波の音のようにひびいたりした。雨季近くの空にとどろく雷鳴ともまごうたり、雷鳴と砲聲とが入りみだれたり、いつしよになつたりした。砲聲

の間に、高射砲や、戦車砲や、機關銃の音がまじる。戦場はこのようなすさまじい銃砲聲によつて明け暮れしているのに、實際はほとんど動きを見せず、いわゆる交綏狀態となつて、じりじりと最後の場へむかつてつきすすんでゆく凄壯な鬼氣を、表面はおだやかな全戦線の底に不氣味に孕んでいた。

こういうときに、今野中隊の兵隊たちが、そのような戦場の空氣などはおかまいなしに、土堤の蔭を飛びまわり始めたのである。みんな裸であつた。

日焼けした兵隊たちの身體は頑丈であつたけれども、正常な姿をとどめている者は稀であつた。痩せた胸に肋骨をむきだしている者が多かつた。中隊は三十七名いるとはいえ、分哨その他任務についている者をのぞくと、中隊本部にいる者はほとんど十名内外にすぎない。チンドウイン川を渡河して以來のジャングル戦闘で、最後まで健康を保持し得た兵隊は指を折るくらいしかなかつた。まずほとんど部隊の大半がマラリヤにおかされた。しかも、その大部分は悪性で、短い時間に命をとられ、あるいは高熱のため腦をおかされて、發狂する者も少なくなかつた。蚊が飛んでいるという普通のいいかたがあてはまらないほど、蚊の密集しているところが多かつた。蚊の幕のなかに人間が入るといつた方が適切なのだ。蚊に食われないためには、歩いているときでも坐つているときでも、横になつているときでも、つねに手を動かし、あるいはタオルでもふりまわしていなければならなかつた。踊つているように滑稽であつた。行動中はいちいち蚊帳を吊ることができない。外被などを頭からひつかぶつて寝ていると、どこからか、すき間からもぐりこんで來て、顔や手を刺す。蚊よりも一層厄介なのは砂蠅である。この地方特有といわれるこのうるさい蠅は猛毒をもつていて、食われた箇所はたちまち紫色に腫れた。膿をもつこともあつた。蚊帳を吊つてもこの微細な蠅はほそい目をとおして入りこんで來る。また密林のなかには兵隊たちを嚙む爲體の知れぬいろいろな蟲がいた。食われたところを掻くと破れて血が出る。そうするとその汁氣のたまつた傷の部分にばかりたかつて刺す陰惨な羽蟲があつた。兵隊たちの顔や手や、露出した部分は、黒くよごれ、紫色になり、凸凹だらけになり、奇妙な斑點ができ、原形をとどめている者は少なかつた。しかも、食糧の缺乏のために、痩せ、マラリヤのために皮膚は黄味を帶びて、しなびた大根のように生氣に乏しかつた。顔だけが青黒く腫にこげて、首だけとつてつけたように見える。アミーバ赤痢（この山中には意外に清流が多かつたが、その水は悪質で、赤痢菌を含んでいた）にかかつている者もあり、脚氣も居り、負傷して繃帶をまいたり、絆創膏をはつたり、アカチンをつけたりしている兵隊も

あつた。

こういう兵隊たちが、裸になつて、ぎらぎらと照りつけて來る太陽の下を、圓陣をつくつて、ぐるぐると駈けまわるのである。走る氣力のないものは、足をふんばつて立ち、兩手を身體といつしよに強く動かして、體操をした。激動することが必要なのだ。彼らの多くは靴をはいていなかつた。チン丘陵の山嶽地帶を突破するときに、靴はすつかり破れてしまつてはきすてるとかわりがなかつた。裏のはんばりがはげれば板片をあてて、紐や葛で卷いたり、片方が役に立たなくなれば一方だけ地下足袋をはいたりした。その地下足袋も酷使のため用をなさなくなつた。跣足ではあぶないので、兵隊たちは新案特許のはきものを工夫した。兵隊は工夫の天才といわれる。龍舌蘭、林投、芭蕉、芋というような植物の葉をぐるぐる卷きにして當座の間にあわせた。器用で根氣のよい兵隊は、それらの葉から纖維を引きだして、草鞋を編んだ。不器用で、不精な兵隊はいつも跣足で怪我ばかりしていた。いま、このジャングルのなかで奇妙な運動をしている十二人の兵隊たちの足を見れば、原形は失つているがともかく靴といえるもの四、草鞋五、跣足三、という具合である。

「爆音」

對空監視哨がどなると、兵隊たちはあわてて藪のなかに逃げこむ。どなるというけれども、腹に力がないので、叫ぶときにはあらかじめ兩手で臍の上をしつかりとおさえなくてはならない。聲が腹にひびいて痛いからだ。それから、あおむいて鮒のように口をあけるが、かすれたように聲にはならなかつた。監視哨の吉崎一等兵は、人なみ以上に圖體が大きいので、自分でもおかしくなつたように、困つたような、てれた苦笑を浮かべた。爆擊機の編隊が上空を通過する。

飛びまわる兵隊も、空腹と病氣のため、とても過激な行動には耐えられなかつた。わずか數分なのに、もう息切れがした。

「ようし、止めえ」

絲島伍長が號令をかける。みんな、おのおのの位置にとまる。二人ほど、尻餅をついた。

「しやぶりかた、始め」

操典にない號令が發せられる。兵隊たちは自分の腕を舐め始める。肩からずるりと手の甲まで舐めてゆき、また肩まで舐めかえす。二の腕や、手の甲を乳をのむようにして、ちゆつちゆつと吸う者もあつた。左右の手をかわるがわる舐めた。うまい、うまい、という者もあつたり、畜生、とか、はあはあと肩で息をついたり、むせている兵隊もあつた。舌のとどかない部分は胸や腹や背を平手でなでて、そのべとつく掌を吸うのである。

絲島伍長はとうきびを食べるような具合に、腕を裏表にくるくるまわしながら、しやぶつていた。兵隊たちは顔見あわせて、げらげらと笑いあつた。笑つてはしやぶつた。この正氣とは思われない行動も、みんなの心のなかによく通じあつていて、その弱々しくはあるが、一種けたたましい笑い聲には、自嘲のひびきなどはなかつた。戰場でともに暮らしたものだけにわかる寛大にして飄逸な感情が流れていた。

異樣な味わいであつた。汗をだして鹽氣をとるための試みであつたが、それは鹽の味ともちがつていた。汗が淋漓とほとばしるほどでもなく、不健康な靑黑い皮膚がややじつとりと濡れている。

團栗といわれるちんちくりんの田丸兵長は、腕も短かかつた。すこし走つたのにもう息ぎれして鞴のように大きく肩をゆすりながら、舌を腕につけた。短い腕をゆつくりと肩から指さきまで舐めた。蟲に食われたり、ジャングルの棘で刺されたり、傷痕凹凸が舌のさきに山脈となつて感じられた。傷口のかさぶたが舌のさきに觸れた。もともと食糧に鹽分のないためか、汗も水つぽかつた。そのころ、食糧は六分の一定量がやつとになつていた。彼は百姓であつたから、兵隊にとられぬ前から汗をたらして働く經驗はたれよりも多かつたが、その汗をこんな風に命がけで舐めるときがあろうとは、夢にも思わなかつた。伐木をしたり、野良で鍬をふるつたり、稻こきをしたりするときに、汗が流れて來て、眼にしみ、また口のなかに入つて來ることもあつて、汗の鹽からさは知つていたが、いまここで吸う汗の味とはまつたくちがつていた。働いていた時分には、短軀ながら筋骨も堅かつたのに、いま自分の身體をしやぶつてみると、ぶよぶよと豆腐のように柔らかくたよりがない。また色も形もきたなく、蟲のついた出來そこないの茄子に似ている。しかし、それはまごうかたもない自分の腕であつた。自分であつた。すると、自分が生きている、生きていたという感慨と、その自分の命に對するかぎりないいとしみの念とが、熱湯のようにどつと舌を傳わつて、胸の底へひびいて來た。

もう四十日にもなる執念深いマラリヤの熱はいくらか下り氣味になつていたのに、またぶりかえしたように、身體中が燒けて來た。かるい眩暈をおぼえて、ふらふらとした。不意に走馬燈のように、屋根の傾いた家、中風で寢ている母、抵當にとられそうになつている田畑、牛小屋、四人の子供、妻、水車の臼、蠶棚、煙草畑、鎭守の鳥居、弟、——あらゆる故鄕のことが頭のなかを去來し始めた。一緒くたのようでもありひとつひとつ別のようでもあつた。二人兄弟で、四つ年下の弟は自分よりも先に出征していた。どこか、ニューギニヤ方面にいるら

しかつたが、消息はまつたく不明であつた。その戰地にいる筈の弟が、故郷の庭で麥をひろげた筵のかたわらに蓑を着て立つている姿がぱつと浮かんだ。望郷は遠い異國の戰場にある兵隊にとつては寶物のように切ない感情のひとつである。しかしこのごろではわざわざ考えだそうとしても、痲痺してしまつた頭では、なにか思いだしてもすぐに朦朧と消えてしまうのが常となつていた。こんなときこんな具合に浮かぶとは思いがけなかつた。しかもそのどれもがあざやかな色とにおいとを帶びていて、苦しいばかりだつた。田丸はそれらの重量を支えかねたようにたおれそうによろけて危うく屁つぴり腰でふん張つた。

ふと、五米ほど離れたところで、一人の兵隊が夢中に手の甲を吸つているのが、眼に入つた。一番仲のよい小宮山上等兵であつた。細面で、日ごろから色の白いのが、アミーバ赤痢にやられて以來、いつそうたよりなげな樣子になつていたが、いま手の甲を吸つている小宮山の細い眼は眼鏡越しに、この日ごろ見かけたこともない生氣をあらわしていた。いきいきとかがやき、唇をつけているところからぐいぐいと引きだされる精氣が、しだいに身體に注入されてゆくようにみえた。あらわになつた肋骨の上を、荒々しい呼吸のたびに、黄色い皮膚が上下する。破れた靴のさきから、足の指がのぞいていたが、力をいれるたびにもごもご動いている。

それを見ると、田丸は不思議な衝動にかられ、おさえがたい狂暴な感情に前後を忘れた。激すると我を忘れる癖の田丸は、いきなり小宮山に飛びついた。ぶつつかられて小宮山はよろけた。おどろいてなにかいおうとするのにかまわず、兩肩をぐつとつかんで、衝立をまわすようにくるりと背をむけさせた。肩をにぎりかえ、小宮山の汗ばんだ背をべろべろと舐めた。むつと鼻の奥にしみる甘酸つぱい臭氣とともに、鹽からいものが舌に刺さつた。唇をつけて背を吸つた。生白い背に灸のあとが六つならんでいた。いよいよ激情を制しきれなくなつた田丸は、うしろから羽がいじめに小宮山に抱きつき、猪首をぐるぐるまわして、ところきらわず戰友の背を舐めた。くつ、くつ、とこみあげて來るものがあつて、いつか、わあわあと聲にだして泣いていた。その聲は自分の耳に入らず、泣いていることも、自分では意識していなかつた。小宮山の肩がふるえ、背がぴくぴくと痙攣したように動いていた。彼も嗚咽しているのがわかつた。田丸は自分の顔を戰友の背にぴたりとおしつけていた。洗濯板のような肋骨の起伏の上を舌が走つた。すると、背につけていた唇に、これまでとはちがつた鹽からいものの流れこむのをおぼえた。それは自分の涙であつたが、彼はそれには氣づかず、自分があまり強く吸つたので、そん

な液汁が新たに戰友の體內からあふれ出て來たのではないかと錯覺した。彼は無我夢中にそのからいものをすすり、泣き喚きながら、友人とそこへ折り重なつてたおれた。彼はさらにはげしい眩暈を感じて、氣を失つたが、なにか喚くような聲とともに自分の背なかを生あたたかいものがずるずると駈けめぐるのを、ぼんやりと感じていた。

第二章　昆蟲と惡魔

「印度公園」は、瀨振りから、敵陣地の方角にむかつて百米ほどの位置にあつた。

そこはちよつとして開濶地で、ゆるやかな斜面になつていたが、むろん、公園としての設備がなにもあるわけではない。今野軍曹の言葉を借りれば、ただ「景色がちよいとよい」というだけの話である。それに名も知れぬ密林の大樹とはまつたく變つて、そこには日本の赤松とほとんど變らない松林があつた。松には日本のにおいがある。これまでの戰線で、ほとんど松を見なかつた兵隊たちは、松の木の鄕愁を感じた。赤い肌の松はひよろ高く、見あげる上方にいつて、はじめて枝を張り、梢を伸ばしていた。不思議と、松林はこの高臺の一角にかぎられていて、霧がまだ消えやらぬ朝まだきや、谷底から霧が風に吹きあげられて來る暮れがたなどは、まつたく一幅の日本畫であつた。今野中隊が任務を帶びて、ここへ瀨振りをかまえた當座は、兵隊たちはこの松林へ來ることをすこぶる好んでいたが、やがてたちまち遊步客は開

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com